

ぼくの大切なともだち

2008(平成20)年5月2日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★★



監督・脚本=パトリス・ルコント/脚本・台詞=ジェローム・トネール/出演=ダニエル・オートウイユ/ダニー・ブーン/ジュリー・ガイエ/アンリ・ガルサン/ジュリー・デュラン (ワイズポリシー配給/2006年フランス映画/96分)

……フランス映画はおしゃれで奥深い！ いわゆる「勝ち組」の中年男への「あなたには大切な友だちがいますか？」との問いに始まる、この映画でそれを再確認！ 「親友はいる！」とムキになって賭けに出た美術商の対をなすキャラは、陽気なタクシー運転手。しかし、2人はホントに親友？ 「人間の証明」ならぬ「親友の証明」はいかに……？ 96分間タップリと、真の友について考察を深めたいものだ。さてひるがえって、今あなたの大切な友だちは……？

男はいくつになっても子供だねえ

あなたには大切な友だちがいますか？ 誰もが思春期や青春には自分自身にそう問いかけ、悩み、自己研鑽に励んできたはず。しかし、大人になり、中年になり、事業に大成功すれば、今更そんな問いかけをされても興味がないのが当然……？

ところが今、カトリーヌ（ジュリー・ガイエ）と共同で美術商を営むフランソワ（ダニエル・オートウイユ）の場合は別。自身の誕生日パーティーで「君の葬式には誰も来ないよ」「君には友だちはいない」「親友はいるの？ 誰なの？」と矢継ぎ早に問われて言葉に窮したフランソワは、思わずムキになって「賭けるか？」ときた。これによって、フランソワは10日以内に親友がいることを証明しなければならないことに。男はいくつになっても子供だねえ……。

おしゃれなフランス映画は奥が深い その1——ギリシャの壺

おしゃれなフランス映画は奥が深いと感心させられるのは、さりげなく「あんな知識、こんな知識」を見せつけてくるため。この映画ではそれが2つある。その第1は、

映画の冒頭オークションのシーンで、フランソワが20万ユーロという高額で紀元前5世紀にホメロスの『イリアス』をもとにつくられたというギリシャのテラコッタ製の壺を競り落とすこと。といっても、ギリシャ文明に疎い私たち日本人にはこの壺が何を意味するのかわからないが、それを理解しなければこの映画の面白さは半減してしまう。これはオークションの司会者が「親友の死を嘆いた男がこの壺に涙を溜めて墓に安置した」という逸話を紹介しているとおり、『トロイ (TROY)』(04年)で描かれた、アキレスと彼の従兄弟であるパトロクルスとの友情を示す壺。

しかし、「君には友だちはいない」と言われているフランソワが「どうしても欲しかった。衝動的な欲望だよ」と言ってまでこれを高値で競り落としたのはなぜ？ そんなパラドックスが、この映画冒頭に示されるおしゃれなところ……。

おしゃれなフランス映画は奥が深い その2——星の王子さま

多くの方は子供の頃にサン＝テグジュペリ作の『星の王子さま』を読んだことがあるはず。しかし今、そこに書かれていたすばらしい世界や言葉を覚えている人は少ないのでは……？ 美術商として成功し、興味の対象が美術品のみになってしまっているフランソワは、もちろん忘却組。しかし、小さい時からクイズ番組が大好きでどんな話にもうんちくを傾ける話好きなタクシー運転手ブリュノ（ダニー・ブーン）にとっては、『星の王子さま』は今でも宝モノ。その一節は「君にとって僕は沢山いるキツネの1匹。でも、互いになじめば大事な存在となる。君は僕のたった1人の人。僕は君のたった1匹のキツネ」だ。彼がわざわざこれをノートに記していたのはなぜ？ それは、彼にもある大きな悩みがあったためであることは明らか。

さて、一見陽気なブリュノの心の悩みとは？ そして、ある日ブリュノのノートからそんな一節を読んだフランソワが思い立ったこととは……？

3本目に観た、ダニエル・オートゥイユの見事な演技に拍手！

昔のフランス人男優ならアラン・ドロンとジャン＝ポール・ベルモンドなどすぐに名前と顔が一致したが、最近のフランス人男優はそうはいかない。しかし、「これぞフランス流フィルム・ノワール！」と断言できる『あるいは裏切りという名の犬』(04年)で観たダニエル・オートゥイユは、印象深い演技でしっかりその顔と名前が一致した(『シネマルーム14』49頁参照)。もっとも、私は彼を『発禁本 SADE』

(00年)で観て「ダニエル・オートゥイユの演技は素晴らしい」と誉めていた(『シネマールーム3』205頁参照)。この2本とも彼の演技はシリアスなものだったが、『ぼくの大切なともだち』でフランソワを演ずるダニエル・オートゥイユは、これらとは全く異なる、成熟したビジネスマンの顔と親友さがしに夢中になる幼い子供の顔の両面を魅力的に演じている。昔、彼が第一の親友だと思っていた男から「ムカつくうぬぼれや屋」と言われるフランソワをみていると、なるほどと納得させられる面もたしかに……。しかし他方で、失敗を覚った彼が自分の株を全部売り払ってギャラリーの経営権をカトリーヌに譲る決心をしたり、最後まであの壺にこだわり、フランソワに対して「君にあの壺を持つ資格はない」と言い放ったドゥラモット(アンリ・ガルサン)に対して壺を譲る決心を固めたり、フランソワの人間性の豊かさはタップリ。そんな幅の広いフランソワという人間を見事に表現した、私が3作目として観たダニエル・オートゥイユの演技に拍手!

パトリス・ルコント監督に注目!

プレスシートによれば、1947年生まれのフランス人監督パトリス・ルコントの作品はたくさんあるが、私が知っているのは『仕立て屋の恋』(88年)と『髪結いの亭主』(90年)くらい。したがって、弁護士業務が忙しい中、いかにフランス映画を観る機会が少なかったかがよくわかる。最近観た『親密すぎるうちあけ話』(04年)は、その思いつきのすばらしさにビックリ。また、そこで展開された挑発的なセリフと想像力をかき立てる会話はエロティックなもので、これぞフランス映画と感心させられたもの。したがって、私の採点は星5つ(『シネマールーム11』215頁参照)。

脚本のジェローム・トネールの名セリフの数々に注目!

その想像力をかき立てる数々の名セリフを生み出したのが脚本のジェローム・トネールだが、そんな彼が『ぼくの大切なともだち』でもパトリス・ルコントとコンビを組み、さまざまな名セリフを生み出している。その代表は何ととっても「愛はお金で買える。けれど、友情は決して買えない」というもの。さらに、タクシー運転手のブリュノから親友になるコツを学びたいフランソワからの「あなたみたいになりたい。誰とでも仲良くできるコツはなんだ?」との質問に対するブリュノの「自分らしくすればいい。大事なのは、感じ良さと笑顔、誠実」との言葉もグッド。ところが、ブリ

ユノにも意外な弱点があった。それは、緊張するとアガってしまい、クイズの答えも出てこなくなる。この映画中盤のハイライトは、ブリュノと親友になれたと考えたフランソワがそれをカトリーヌらに証明するため一計を案じ、ブリュノがそれに乗るシーケンス。その計画がいかにも人をバカにしたものか気づかないフランソワはあまりにも無神経だが、結果的にそんなひどい仕打ちを受けたブリュノが壺を叩き壊した上で吐き捨てるように叫ぶ「涙はどこにある？」のセリフは最高！

フランソワとカトリーヌの男女愛は……？

さらに、賭けに勝ったのか負けたのかについて、フランソワとカトリーヌが交わす会話が面白い。すなわち、「僕は賭けに負けた」と認めるフランソワに対して、「証拠などない。愛があるだけ」というカトリーヌのセリフもいい。また、いかにもフランス映画らしく（？）同性愛者であることを公言しているカトリーヌが、この土壇場でフランソワに対して「あなたの友だちになりたかった」と搾り出すように言うセリフも奥深い。こんな珠玉のセリフをいっぱい散りばめた、パトリス・ルコント監督の演出とジェローム・トネールの脚本に十分注目しなければ……。

フランスにも『クイズ・ミリオネア』が！

私はバラエティー番組もクイズ番組もほとんど観ないが、みのもんた氏が司会する『クイズ・ミリオネア』という番組は部分的に過去何度か観たことがある。そこでは「ファイナルアンサー？」と念を押して答えを引き出し、正解か不正解かを発表するまでの緊張感をいかに引っぱるかが司会者の腕の見せどころ……？

この映画終盤のハイライトは、フランスにもある生中継の『クイズ・ミリオネア』のシーケンス。フランス映画は奥が深いから、ミステリー作品ではない『ぼくの大切なともだち』でも物語は二転三転しながら進んでいく。したがって、若い頃から夢みていた『クイズ・ミリオネア』にブリュノが解答者として出演できたのは、いろいろな伏線があつてのこと。その面白い展開はあなた自身の目で確認してもらいたいが、最高の舞台で肝心のブリュノは……？

「ライフライン」にみる親友像は……？

この終盤のクライマックスで活用されるのが「ライフライン」。つまり、解答者が

